

北水研ニュース

No. 15

昭和51年 3月
水産庁
北海道水産研究所
北海道余市郡余市町
浜中町238番地
電話 (01352)
3-3141~3144
郵便番号: 046

釧路庁舎の上棟式 挙 行 さ れ る

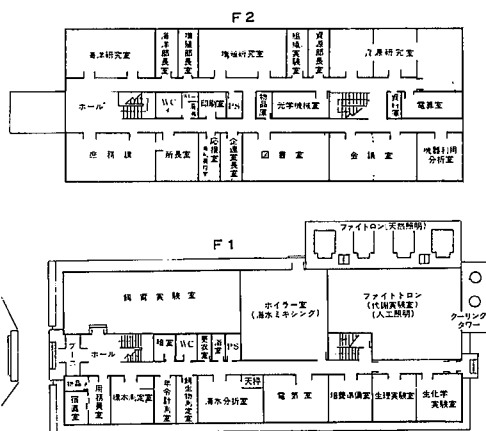
釧路庁舎はその後工事に若干の遅れを生じ、6月の竣工が見込まれているが、昨年11月28日の佳き日に、現地にて上棟式が、東海興業K.K.を施主として行われ



上 棟 式

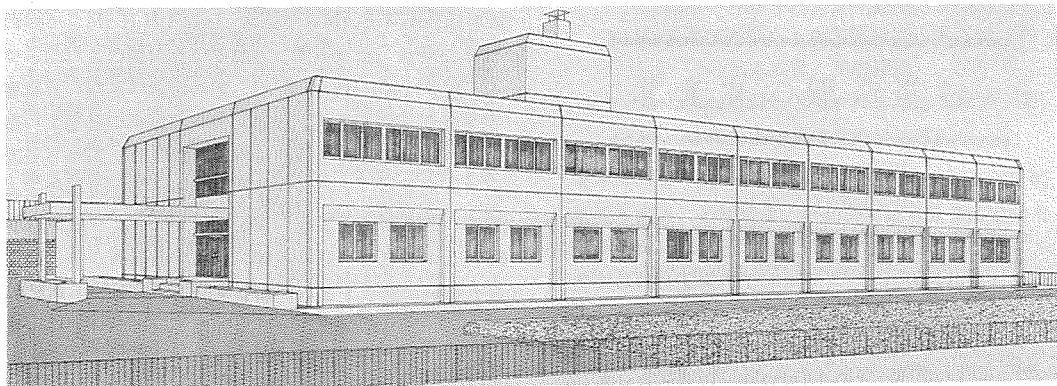
た。式には釧路市長を始め漁業関係各団体及び地域住民代表等多数の参列を得て盛大に挙行された。当日は快晴に恵まれ、出席者の方々から一日も早く移転して業務を開始し、漁民の期待に沿うよう強く要望された。

(所長)



本庁舎配置図

0 10 20M



完 成 予 想 図

目

次

釧路庁舎の上棟式挙行される……………	1 頁	カムチャッカ半島周辺の スケトウダラ資源の現況……………	4 頁
昭和50年度スルメイカ 資源漁海況検討会議……………	2	昭和50年度増養殖研究推進会議……………	5
FAO主催のイカ・タコに 関する専門家協議会に出席して……………	3	二人のソ連の女性漁業生物学者……………	5
北光丸の建造進む……………	3	北水研日誌……………	6
		編集後記……………	6

昭和50年度スルメイカ資源、 漁海況検討会議

(第6回スルメイカ資源研究連絡協議会)

日時 昭和51年1月28、29日
場所 札幌市、北海道庁共済会館
参加機関 28
参加人員 47名
議題

1. 研究発表

- (1) スルメイカの肥満度についての検討
安達二郎(島根水試)
- (2) スルメイカの月令別成長モデルと系統群判別方法
村田 守(北水研)
- (3) 日本海におけるスルメイカ標識放流試験結果について
十三邦昭(青森水試)
赤羽光秋(")
- (4) 八戸沖におけるスルメイカの異形群の出現(1975)
佐藤祐二(東北水研八戸支所)
- (5) 水中観測によるスルメイカの行動とイカ角鉤の動き
小倉通男(東水大)
名角辰郎(兵庫水試)
- (6) 1975年の太平洋アカイカ調査結果について
高梨勝美(青森水試)
- (7) 黄海におけるスルメイカ調査結果について
—1975年秋季東奥丸調査結果—
赤羽光秋(青森水試)
十三邦昭(")
- (8) 黄海におけるスルメイカの分布特性
—1975年秋季熊本丸による調査結果—
笠原昭吾(日水研)
高岡二三四(熊本水高)
- (9) 北西大西洋スルメイカ調査結果の概況
市川 渡(海洋水産資源開発センター)

2. 昭和50年度におけるスルメイカの資源状態と漁況についての総括

3. 昭和51年度の調査研究計画の協議

この会議は今年で第6回を迎えたが、そもそもの始まりは、農林水産技術会議によって昭和42～44年に実施された特別研究(スルメイカ漁況予測精度向上のための資源変動機構に関する研究)の報告会が

源となっている。特研の会議は外海に望む水研、水試の研究者が多数参加し、研究課題も資源、漁況変動機構解明の基盤としての系統群、分布、回遊、再生産など幅広くとりあげられたため、資源特性についての論議と情報交換は有効な役割を果たしたように思う。44年度の研究のしめくくりとなった最後の会議において、特研は終了しても研究会議だけは今後も残したいという希望が強く、結局、以後の会議を「スルメイカ資源研究連絡協議会」と称して継承することになったのである。

本会議は45年度の第1回(46年3月、余市)を皮切りに、北水研、日水研、東北水研八戸支所が順ぐりに持ち回りで主催することにして、毎年冬季に開催されてきた。第6回の会議を終えてふりかえってみると、45～47年は日本海沖合の漁場開発がピークに達し、いか釣漁業はもっぱら日本海に集中し、研究論議も日本海の系統群構成、資源水準、漁場形成機構などに関したものが主であった。しかし日本海漁場における生産増とは対蹠的に太平洋側の生産は低下を続け、冬生れ群の資源量の減少には強い関心が寄せられたが、一方漁業は漁獲の減少をとりもどすべく、更に新漁場と新資源の開発に積極的にとりこんできた。その結果49、50年の本会議の研究発表からもうかがえるように、最近イカ釣漁業は急速にグローバルになりつつある。これらの漁業のうちで遠洋漁業については新海洋法後にどうなるかは予断を許さないが、49年から登場した太平洋のアカイカ漁業は明らかに我が国の200海里経済水域に属するものとして注目される。このイカの分布、生活環境および資源量などは今後に解明を急がなければならないが、このように最近の漁業情勢から研究の間口も著しく広がってきており、今年度の研究発表はまさにそれを反映した色合いが濃い。しかし、今後の漁業は我が国の沿岸、沖合(200海里経済水域)の資源を有効に利用する観点に立って、資源の管理と適切な漁業管理が益々必要となってくるであろうから、この研究会もその方向で一層論議を深めて行かねばならないと思われる。

50年度の会議は北海道で厳冬の時期に開催され、また日本列島の日本海側は豪雪による鉄道の不通で、出席出来ない人も多数出るのではないかと心配されたが、会議の2日程前には降り続いた雪も止み、裏日本の国鉄幹線も開通し、予定されていた大多数の人が出席出来たのは幸であった。会議もまず参加することに意義がある。次回も多数の参加を得て論議のつくされることを期待する。51年度の会議は日水研主催の予定である。

(資源部 新谷久男)

F A O主催のイカ・タコに関する専門家協議会に出席して

F A Oは人類の蛋白食糧確保のために水産資源の開発に指導的努力をはらってきた。しかし今日では魚類資源はほとんど開発しつくされ、かえって漁獲量の増大よりもMSY（最大持続生産）の理念のもとに漁業管理の要請が強い。このような情勢から水産の蛋白食糧の増産はもはや魚類に依存することは出来ず、その他の動物によらざるを得なくなっているが、日本では古くからイカ・タコ類を食し、その漁労技術は他国には見られない独特の発達を遂げ、中でもイカ釣り漁業は海外にまで進出するに至った。

F A Oは世界のイカ・タコの資源は膨大であり、その極く一部が日本その他特定の少数の国によって利用されているだけで、将来、開発が進められるならば、世界の陸棚とその斜面上の海域からは800~1,000万トン、その沖合の外洋からはその8倍以上の生産が可能であろうと推定している。このような見地から今後頭足類資源の開発を積極的に進め、特に食糧不足に悩む開発途上国に供給することを目的として、その資源の開発利用のためのガイドラインを確立するため、この漁業の先進国である日本に協力を呼びかけて、1975年9月9~10日に東京で主題の会議が開催されたのである。この会議は水産庁研究開発部研究課国際資源班がその運営にあたり、F A OからDr.J.Scharfe (Secretary) とMr.S.Takasugi (Assistant secretary)、西独からMr.H.H.Engel、米国からMr.S.Katoと日本側からは17名の関係者が参加して開かれた。最初に米沢審議官の歓迎の挨拶の後、Dr.Scharfeが謝辞を述べ、続いて座長に矢島信一氏（東海区水産研究所漁具漁法部長）が選ばれて議題に移ったが、3日間にわたりあらかじめ用意された論文にもとづいて、日本側からは日本周海のスルメイカの分布・回遊・資源とその漁況予報、イカ釣り漁業の漁船（99トン型）と自動イカ釣り機、タコ漁業の漁具漁法、海外におけるイカ類の分布と漁業、およびイカ・タコ類の利用の概要などについて説明し、Mr.Engelはトロール漁業によるイカの漁獲について、Mr.Katoはカリフォルニア沿岸のヤリイカ漁業について報告し、それぞれ討論が行なわれ、最終日には総合討論に続いて勧告文の起草を行なって終了した。この会議の内容については、その主軸となった日本側から提出された論文については「世界のイカ・タコ資源の開発とその利用」（1795、水産庁）にまとめられているので、ここにあらためて述べる必要はないが、特に注目を引いたのは最終日における論議であった。この日の論議の焦点は開発（採捕）、技術の採用の

問題であった。Dr.Scharfeの意見は開発途上国に対する技術の普及は量も安い経費で手軽にとりくめる原始的なものであるべきだということであったが、そうなると思えば日本における高度の漁労技術を伝える意義がなくなることである。また漁獲と並行して保蔵流通の問題が解決されなければならないことや、なおそれ以前に、民族にはそれぞれ特有の食事慣習があるから、イカ・タコを食べない国民にはそれを食べさせる方法を見出すことが先決であるなどの問題が提起された。しかし資源開発以外の問題はF A Oではそれぞれの関係部門で検討されているということであった。

一方Mr.Engelからは開発に対してトロール漁業の利用が提案されたが、この場合も経営経済的問題が漁獲物の需要と関係して出てくることは避けられない。またDr.Scharfeは外洋の資源の開発に関心が強いようであった。つまり彼は日本側から太平洋のDceanic squidの種類・分布・資源量やその漁獲方法などについての知見を得たかったようであったが、まだ知見が少なく今後の開発的調査にまっ外はなかった。世界のイカ・タコ類の分布については、ソ連に期待するところが大きかったが、出席が予定されていたDr.G.N.Stepanovが都合により来られなかったのは残念であった。日本側にとってはこの会議では新しい知見が少なく、あまり得るところがなかったが、日本側から提出した論文やそれに加えて水島清治氏（神奈川県水産試験場）による99トン型イカ釣り漁船の操業実態についての8ミリカラーフィルムの映写は、日本の頭足類漁業の理解のためには大変有意義であったと思う。

（資源部 新谷久男）

北光丸の建造進む

北水研ニュースNo14でご紹介しました北光丸（代船、旧船名を襲名）の建造は、昭和50年12月6日に室蘭市の檜崎造船株式会社で起工式が行なわれました。

船殻は同社工場内でブロックごとに溶接組み立てが行なわれた後、51年1月に船台に運ばれ接続され、ようやく船としての全体の形が整ってきています。一方、搭載される主機関・発電機なども各メーカーによって製作され、2月に入ってそれぞれ工場試運転検査も終り、造船所に運ばれて3月上旬には船体への据付けが行なわれます。

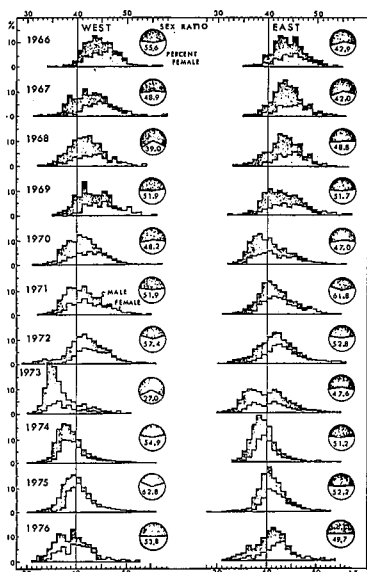
昭和51年3月16日、進水式が挙行され、海に浮ぶまでに工事は進展しております。これからは各種装置などのとりつけ、配管・配線などこまかい艤装に入るわけですが、新しい北光丸は使いよい美しい船が竣工されるよう、関係者の一人としてねがっております。

（資源部 服部茂昌）

カムチャッカ半島周辺の スケトウダラ資源の現況

北太平洋のスケトウダラ資源は、巨視的に見て、本土周辺群、カムチャッカ半島周辺群および東部ベーリング海の群の三つに分かれるが、この三つはそれぞれ違った様相を示していて興味深い。まず、本土周辺の群は、道南日本海岸・太平洋岸・東北太平洋岸などの局地的な増加を含みつつも大局的には安定し、年産60万トン前後の水準を続けている。東部ベーリング海では、日本の母船式漁業および工船トロール漁業およびソ連漁業が、1972年に200万トンを越える生産をあげたが、その前後から過剰開発による生産性低下が問題となり、100万とか85万という水準への漁獲量規制が大きな問題となっている。それらに対し、カムチャッカ半島周辺の状況は好調で、1973年の日・ソ・韓の漁獲量は、国連統計より類推して230万トン前後、そして続く1974・75年もそれに匹敵もしくは上廻る生産があったと想像される。

日本は、その約半、毎年80万トン前後を漁獲し、稚内、釧路、塩釜などの漁業基地に興った近代的水産加工業の発展に大いに寄与した。日本より遙かに生産量の大きいソ連にとって、近年強力に推進している食糧政策、特に水産物利用計画の、恐らくは筆頭種として、重要な役割を果たしていると推定される。生産量は低い、伸び率は圧倒的に高い韓国漁業にとっても、近代的な大型工船トロール漁業を育てる原動力として、重要な役割を果たしたと考えられる。



東西カムチャッカの1～4月の成魚体長組成と性比。

われわれの調査によると、最近3ヶ年のこの豊漁は、1967年生まれはやや優勢な年級および1968年生まれの非常に優勢な年級が漁獲対象資源に加入してきたことによる。それは、図の漁獲物体長組成や性比の推移からも明らかであろう。

しかし、さすがの卓越年級も本1976年には、7・8才と高令になり衰退過程に入る。そして、その後の年級は、1969年生まれが非常に不漁、1970年生まれがやや不漁と余り期待出来ない。ただ、図にもみられるように、1971年生まれの加入がかなりあり、この年級は幼稚魚時代から豊富さが推定されていたので、ある程度落ち込みをカバーしてくれると考えられる。しかし、この年級の加入群は雄が多いであろうから、魚価面ではあまり貢献しないであろう。今後数年は、1971年生まれおよびそれ以後の年級の推移にもよるが、豊漁は期待出来ないと見るべきであろう。

実は、卓越年級が貢献する以前は、図にも見られるように漁獲物体長組成の小型化が進行していた。また、北転船のトロール1時間当たり漁獲量も1969年以後低下してきていた。これらは漁獲による資源間引き効果と見做された。1969年の日・ソ・韓3国の漁獲量は124万トンで、1973年の半分に当る。卓越年級がもし出現していなかったら、増強された3国の漁獲努力量と魚群のもつ生物的生産力の間の矛盾が、既に顕在していたと想像される。

北太平洋の多くの漁種が、国際的漁獲規制の下に置かれている中で、生産量が最も大きいこの群が規制の外にあったのも、矢張り卓越年級の出現のおかげであろう。しかし、その時期はもう去ろうとしている。

年級変動の原因に迫る研究は、流水・領海その他の関係で、われわれの手に乗る問題ではない。しかし、年級変動がこの資源の変動の最も重要な部分を占めると考えられるため、それを可及的速に察知し得るように、卵、稚魚、幼魚各年令期の分布域、集団密度、生長、成熟などの属性と年級豊度の関係を調査している。見通しは明らかいと云える。

話は変わるが、先日(51・2・5)ヴァンクーバーにある水産技術研究所から、所長さんほか1名の方が来られ、スケトウダラの卵や魚肉の加工処理のことを学んでいかれた。話を聞くと、ジョージア海峡その他カナダ沿岸でスケトウダラが増えているそうである。この水域でも大規模なスケトウダラ漁業が興るかも知れない。ロシアで「ТОЛбо МИНТАИ」(スケトウダラだけ)というのは、「有用魚を獲り尽してしまってもう何もいなくなった」という意味だそうである。北太平洋全域でこのことわざが進行したということになるのかもしれない。

(資源部 北野 裕)

昭和50年度増養殖 研究推進会議

2月18日から20日までの3日間、東京都千代田区・麴町会館において表題の会議が開催された。参加機関は水産庁・技術会議・栽培漁業協会・農土試・東北水研・東海水研・淡水研・遠洋水研・真珠研・南西水研・西海水研および北水研で、参加者は64名であった。

今回の会議は海洋法をはじめとする最近の日本漁業をめぐるきびしい諸情勢のなかで淡水・浅海域利用についての見なおしと、その可能性について最近各地で実施されている栽培漁業を事例として検討をくわえるということが中心課題であった。

このことについては栽培漁業の性格からいって、単に増殖研究の立場からの討議では不充分であり、資源研究の立場からも討議を進めてもらい、両研究の接点について共通理解を深めたのが大きな特色であった。

なお討議の素材としてサケ・マスとタイの増養殖がとりあげられ活発な討議がおこなわれた。

これらの内容は近日中に印刷公表される予定であるので詳しいことはそれにゆずり、ここでは議題をかかげるにとどめた。

I. 総 会

1. 昭和51年度増養殖予算について

水産増養殖に関するFAO会議について
本間昭郎（研究開発部）

2. 海洋水産増養殖開発基本方針について

資源水産増養殖に関する先進国協力について
美藤香苗（研究開発部）

3. UJNR水産増養殖部会の活動経過について

菅野 尚（東北水研）

II. 全体会議

1. 淡水・浅海域利用の可能性… 花村宣彦

（南西水研）

2. サケ・マス増養殖の展望

ふ化事業の評価と展望… 須田 明（研究開発部）
資源研究の立場から… 待島精治（遠洋水研）
サケ・マスの生物特性から… 白旗総一郎（淡水研）
種苗育成放流のもつ意義… 佐藤重勝（東北水研）

3. タイ増養殖の展望

タイ養殖の現状と問題点… 岡本 亮（南西水研）
資源研究の立場から… 岡田啓介（東海水研）
タイの生態研究から… 最首光三（西海水研）
栽培事業の現状と問題点… 古沢 徹（栽培協会）
（増殖部 福原英司）

二人のソ連の 女性漁業生物学者

—日ソ漁委・科学技術小委員会こぼれ話—

北洋にしんの資源問題で日ソ漁業委員会・科学技術小委員会に出席するようになってから、かれこれ10年近く経過した。この間、いろいろのこともあったが本年第20回を迎えるこの会議も海洋法会議を軸として変化しつつある手きびしい世界漁業事情の風当たりをつよくうけてゆくものと思われる。このことはさておいて、私は会議を通じて数人のソ連の研究者を知ることが出来たが、その中での二人の女性研究者についての印象をのべてみたい。

カーチナ・テ・エフ（太平洋漁業海洋学研究所・カムチャツカ支部・実験所所長・生物学博士候補）

女史と初めて会ったのは昭和44年の東京会議であったと思う。この年は彼女が初めて日ソ会議に参加した年でもあった。当時30才をかなりこえていた筈であるが、ソ連の中年婦人にありがちな大柄なタイプでなく、小柄で若々しく仲々の美人であった。彼女はにしんの研究者であり、私と資源論争の相手となったわけである。当時は実験所の室長であった。相手に対する日本人の感覚で討議に入った私は、まず、彼女の身体ににあわぬ早口と、目をひかせて問題をきびしくまくしたててくるのに驚かされた。頭の回転もまた早い。論議が白熱するとますます早口になり、ソ連側の通訳が困って、もっとゆっくり発言してくれと頼む仕末であった。あとでわかったことであったが、彼女はオリュートル水域のにしん資源の保護問題で、現地の漁業者に漁獲制限を提唱してきた。しかし漁業者は仲々研究者のいうことを納得せず、数年かかって資源の減少を説明し、昭和44年にはソ連側の漁獲をやっと禁漁にもちこんだという背景があった。にしんの数量変動に対する論理の展開には、われわれの側からみればいろいろ問題もあったが、ともかくも資源の保護を前面におしたてて終始ベースをくずさぬ彼女の姿勢には、現地漁業者との話し合いによる実践的な過程があったのである。非公式の席上で、日本の科学者は一尾の親がいなくても魚の再生産が出来ると考えているのか……と極論でかみついていたのには閉口した。美人である丈に、そのときの目のするどさはいまも深く印象にのっている。

その後、昭和50年まで、私が病気で休んだ1回をのぞいて、毎年3月に彼女と会うことになった。昨年、東京会議で会ったことは、初めて会ったときの気負った空気はかなりなくなり、年令とともに落ち着いた態度にみえた。会議をはなれたレセプションの席上では子

供さんの話をしあったりして良きママさんぶりをみせた。しかし日本の漁業生物の研究にたずさわっている人数の少ないことに相手は驚き、われわれはソ連の研究調査組織の大きさにうらやましさを禁じ得なかった。調査船に自らのり、陸上でも種々の測定をし、年令をよみ、統計をつくり、解析し文献をしらべ、論文をかきまで1人か2人のスタッフでやってゆかねばならぬ日本の研究組織を仲々信じてもらえなかったことも印象ぶかいことの一つであった。第20回の本年の会議に女史は出てくるかどうかわからぬという。

クロギウス・エク・ヴェ（太平洋漁業研究所カムチャツカ支部・主任研究員・生物学博士）

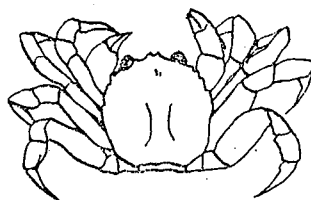
女史はベニザケの研究者であったので、会議で論議したことはなく、この面については遠洋研のサケ・マスグループの方々がくわしい。私はたまたまレセプションの席で合うだけであったが、カーチナ女史とは対照的で、白髪の大柄な老婦人であり、常にニコヤカな微笑をたたえていた。きくところによると、女史はカムチャツカのあの極寒の中にあつて、常に河川のベニザケの生態研究に長い間、うちこんできたという。私が先に贈呈したにしん稚魚の論文をみてくれたらしく、「貴方とはゆっくり魚類の幼稚魚の生活とその環境について話したいが、その時間がなくて残念だ。」とくりかえし強調していた。それは単なる社交的な言葉でないことは女史の態度や表現からよみとれ、ギスギスした会議の中で、はじめて学者に会ったような、それも自然と四つに組んだ素朴くでねばりつよいソ連や北欧の学者に会ったような気がしたことを覚えている。女史は昭和47年の会議を最後に会議に姿をみせなくなった。

国柄のちがいは言いながら、この二人の女性研究者は夫々異なったタイプながら、いろいろの感慨を私に与えた。しかし女性のみならず私の知ったソ連の研究者メンバーは男性群も年々変化してきた。そして今は漁業行政官が増加してきている。このことは一体何を意味するものであろうか？

（資源部 飯塚 篤）

北 水 研 日 誌

- 11. 18 地方連絡会議出席のため斉藤課長札幌市へ出張。
- 11. 28 長谷川所長研究事務打合せのため釧路市へ出張 30日まで。
- 12. 5 北光丸代船起工式のため服部資源部長室蘭市へ出張、7日まで。
- 12. 7 所長会議のため長谷川所長上京、10日まで。
- 12. 14 資源・海洋部長会議出席のため服部資源部長及び駒木海洋部長上京、19日まで。
施設担当者会議のため小間課長補佐筑波へ出張、19日まで。
- 1. 21 共済組合運営委員会出席のため斉藤課長札幌市へ出張。
- 1. 24 水産庁普及課橋本班長、海洋開発センター藤田部長ほか、事務打合せのため来所。
- 1. 28 スルメイカ漁海況検討会、札幌市にて開催。
長谷川所長、資源部新谷室長ほか担当官出席、29日まで。
- 2. 1 所長懇談会のため長谷川所長上京 5日まで
- 2. 5 カナダ国ヴァンクーバー 研究所長ラッセル氏、ツユキ氏視察のため来所。
- 2. 12 場所長会議のため長谷川所長上京、15日まで。
- 2. 18 アメリカ北西水産研究所漁業資料管理システム部長フリデン博士講演のため来所。
- 2. 22 庶務課長会議出席のため斉藤課長上京、27日まで。



編 集 後 記

昨年は北海道に回帰したサケの漁獲量が記録的に多かったことで大変な話題となりましたが、北野技官の投稿によるとカムチャツカ周辺のスケトウダラ資源については漁獲努力の増大と国際化の2点から極めてきびしい状態にあることが指摘されています。また新谷

技官によるとスルメイカ資源にも問題点が多く、とりわけ太平洋側の冬生れ群の減少に強い関心が寄せられるということでイカ資源の将来もけわしいことが理解できました。

（51. 3. 15 福原英司）